



# 曉鐘の音

NO. 31

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2024.10.2

## はじめに

第 31 号は、令和 6 年度になってから最初の曉鐘の音になります。今年度は新しく教員の皆様を 3 名、現職院生の皆様を 11 名、学部卒院生の皆様を 8 名迎え入れ、昨年度に引き続き和気藹々とした雰囲気の中で学びや研究に勤しんでおります。

さて、第 31 号では、新たに教職大学院の一員となった皆様を中心に原稿を頂戴いたしました。また、各種学会に自主的に参加している学生にも、研究に対する思いの丈を聞いてまいりました。どの文章も、教師として、そして研究する者としてのモチベーションを高めるものであるとともに、ほっこりとしたエピソード等も添えられております。どうかお楽しみくださいませ。



## 教職大学院での学び

教職実践専攻（教職大学院）

准教授 伊藤 景子

このたび縁あって秋田大学教職大学院の一員に加えていただくことになり、秋田大学に赴任してから 4 か月が経ちました。将来、教育に関わる仕事に就こうとしている教職大学院生の皆さんとの出会いはとても新鮮で、皆さんと関わる機会をい

ただけたことが何よりの喜びです。また、母校である秋田大学に勤務することができ、当時と比較して変わったことと変わらないことの両面を感じながら新しい場所での生活を楽しんでおります。

大学卒業後、中学校外国語科担当教員として採

用され、県内公立中学校勤務を長く経験しました。中学校教員だったとき、教育専門監として本務校勤務だけでなく、近隣の中学校二校での勤務を兼任する仕事をしたこともあります。また、秋田県教育庁での教育行政職も経験させていただきました。さらに、昨年度までの二年間は小学校勤務を経験しました。業務内容や環境に慣れず、心が折れそうになることも多々ありましたが、どの校種や職種においても貴重な経験をさせていただき有り難い気持ちでいっぱいです。中学校教員としてスタートしたはずの教員生活ですが、このように人生はいつ何が起こるか分かりません。その中で、自分の役割を一生懸命に果たすことが、県内の各学校の子どもたちや保護者、先生方の幸せに

つながっているかもしれないと自分に言い聞かせていました。

院生の皆さんにとっても教職大学院での生活は、これまでの生活とは異なる新たな出会いと学びに溢れたものになっていることと思います。現職教員院生と学部卒院生がここで出会い、共に学びを深めることのできる本当に貴重な環境であると感じます。様々な講義や演習、実習、協議などを通して、また、日常的なコミュニケーションも深めながら、異校種や異年齢から学ぶ学修環境を存分に生かしてほしいと思います。

私自身も教職大学院でのご縁を大切にしながら、様々な活動を通して皆様と共に学び続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 二度目の秋田大学

### 学校マネジメントコース 現職院生1年次 大淵 亮

30年ほど前、秋田大学の鉱山学部（現理工学部・国際資源学部）へ入学し、学部の授業やフィールドワークを通して卒業後は「地図に残る仕事」に関わりたいと考え、4年次ではトンネルやダムの岩盤を研究する分野を専攻した。当時を振り返ると、卒論の研究で建設中の神流川発電所を訪れたことや多くの友人と貴重な時間を過ごしたことなどを懐かしく思い出す。当時は、手形キャンパスの北側での学生生活が中心だったため、教育学部側にはほとんど来たことがなく、同じ大学とは言え新鮮な気持ちで4月を迎えた。

工業高校での教員生活を送る中で、現場に求められる教育課題も時代とともに大きく変わり、特に令和の時代に入ってからは変化のスピードが一気に加速しているような気がしていた。現場での実践知を自分なりに積み重ねてきたものの、現在の学校教育について一度じっくり学ぶ機会があればと考えており、今回教職大学院への入学機会を得たことは大変ありがたかった。

4月からの大学院での生活は、当初は授業の準備や課題をこなすのに必死だったが、小学校や特別支援学校の先生方との校種を超えた学修を通して児童生徒の学びを連続的に捉えて考えられるようになったり、インクルーシブ教育における合理的配慮の必要性を実感したりすることができた。現場を離れることで勤務校や自分自身についても俯瞰的に分析できたり、脈々と受け継がれてきた秋田の授業力や学校が有する大きな責任などに改めて気付いたりすることもできた。そして何より、未来の秋田の教育を支える学部大学院生との学びは、柔軟な発想から新たな気付きが生まれ、また、その真剣な眼差しに日々触れることで教員としての初心に立ち返ることができるなど貴重なものとなっている。

教職大学院での一年はあっという間の一年になると思うが、二度目の秋田大学での学生生活を自分なりに謳歌し、現場での実践に生かしていきたいと思う。

## 教職大学院での生活を通して

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 佐藤 愛海

この半年間を通して、入学前よりも教職大学院の魅力を感じることが出来た。私が教職大学院に進学したのは、自身の専門力だけではなく、同時に教師としての資質能力の向上に努めることで、理想の教師像に近づきたいと思ったからである。前期の授業は、秋田の探究型授業を核とした模擬授業づくりを始め、秋田県の教師のリーダー的存在になるために欠かせない活動が出来た。学部生時代の授業はほとんどが聴講型であったが、大学院の授業はディスカッション等のアクティブラーニングが多く、現職の先生の経験も踏まえながら考えを深めることが出来た。また日頃の院生室で仲間と対話することによって、児童・生徒の現状や学校の実態等、様々な視点から教育について知見を深められたため、今まで以上に教壇に立った際のイメージがもてるようになった。

さらに大学院では講義のみではなく、前期の観察実習(インターンシップ)を通して新しい学びを得ることが出来た。過去の実習では、生徒理解を図

る前に授業づくりに必死に取り組んでいたため、本当に良い授業づくりに取り組んでいたかと問われるとそうではない。今回の前期インターンシップでは、生徒理解を深めた上で授業づくりを進めるだけでなく、授業を経て生徒理解につなげるというように、「生徒理解と授業づくりの往還」の大切さを改めて実感できた。半年という短い期間であったが、学部生では体験できなかった現場の声を直に聞くことが出来たり、実践を通して教育の在り方を考えたりすることで、より一層教職に対する意識や見通しがもてた。

大学院生活をより充実させるために、これまでで培った知識や考え方を生かして、様々な人からの意見や指導を踏まえつつ、よりよい教師になるため全力を尽くしたい。後期からはいよいよ自身の研究に向けた実践授業が始まる。今まで以上に教師としての自覚と責任をもって活動に取り組み、私の理想とする教師像に近づくため、一つ一つの活動に精一杯取り組んでいきたい。

## 学会発表に向けて —今だからできる挑戦・今だからしたい挑戦—

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生2年次 高橋 想奈

教職大学院では取り組むべき課題や実習、その他業務が多くあり、充実した日々を送ることができています。そのような(まずまず忙しい)中で、私は“学会発表”をしようと考えています。なぜこのような状況でも学会発表をしたがるのか? 僕の想いを少しお話できればと思います。よかったらお付き合いください!

今年は、日本地理教育学会(8月)、そして日本社会科教育学会(11月)で発表を行う予定です。

8月は、春休みに行った360度カメラ(Go Pro)を用いた小学校社会科におけるフィールドワーク教材の開発について、11月は、大学院で行っている実践研究(小学校中学年の社会科・地誌学習に関する研究)の進捗を発表する予定です。この2つの研究を進めていく中で、大学の先生方、そして教職実践インターンシップで関わった先生方や児童・生徒、現職院生やストマス等、多くの方に協力してもらいました。多くの温かい

応援や協力があったからこそ「全国に向けて自分の研究を発信し、成果として残したい」という思いが徐々に強くなってきました。今の環境だからこそ、そして院生である今だからこそ“できる挑戦”だと思っています。

そして、学会発表をしたい一番の理由としては、やはり「研究が楽しいから」です。理論と実践を往還し、子どもたちと関わりながら実践研究できるのが教職大学院のよさです。毎週試行錯誤して授業をつくり、それに対する子どもの反応をみるのはとても楽しいです。このように思いっき

り楽しんだものを成果として残すことは、来年から教員として働いていく際の自信につながり、多忙な中で授業改善・研究をする上での軸にもなると思います。教員になる前の今だからこそ“したい挑戦”です。

これからは本番に向け、研究を更にブラッシュアップしていきたいので、是非、僕に研究の話題を振っていただければと思います（笑）。そして皆様の感想やご意見を踏まえ、この大学院だからこそできる研究を目指していきたい所存です

## 教育現場での夏の思い出

教職実践専攻（教職大学院）

教授 和田 渉

夏と言えば、「国際交流」。教育現場にいた私にとっての夏の思い出は、「夏休みの思い出」です。学校（授業中）ではできないことをチャレンジしようと毎年思っていました。英語教師ということもあり本当は海外へ出かけたいところですが、お金も時間もないことから和田家は毎年のようにホストファミリーを引き受けてきました。当時の私は40歳代、妻と娘3人（高校生、中学生、小学生）の5人家族です。

鹿角市の姉妹都市であるハンガリー・ショプロン市からアグネシュという女子高校生が2度滞在しました。彼女は日本語が上手で、アニメ「セーラームーン」の大ファン。娘たちとは、プリクラ、カラオケ、そして花火の後は怪談話で盛り上がっていました。娘のセーラー服を着てカラオケでは何十回もセーラームーンの歌を歌っていたそうです。帰りが遅くなり私が迎えに行ったら、彼女の一言は「ごめんなさい。私は悪い子です。だから怒るなら私です」と涙目になり、娘たちからは「お父さん、アグネシュを叱らないで！私たちが誘ったんだから」と言われ、娘が4人になっ

たという感覚でした。子どもたちの交流はとても自然体で、お互いが溶け込み、若さから湧き上がる行動力に圧倒されました。帰国の日、アグネシュはいよいよ出発というとき玄関に出てこないで心配になって探しにいったら、ずっとトイレに閉じこもり「私、帰りたくない。日本の高校生になりたい。」と泣き叫んでいました。結局、娘たちが説得し、出発時刻を遅らせるはめになったものの、どうにか帰国の途につきました。

ドイツのスポーツユースから男子高校生のチームを迎えました。彼は日本語が流暢で、見るからにスポーツマンでした。ホームステイ初日、「野球をやってみたい。ドイツで野球をやったことがないので、日本に来たら野球をやるのが夢だった」とのこと。知り合いの先生に頼んで野球部の練習に参加させていただきました。身振り手振りで教えてもらい野球を存分に楽しんでいました。当時、長女は大学受験を控えていました。問題を解いている娘のノートを覗き、「日本の高校生は勉強できないんだね。こんな易しい問題の答えを間違っているよ」と指摘された娘は「何よ、

私が馬鹿ってこと？」と言り返す始末。子どもたちの遠慮のないストレートなコミュニケーション力に圧倒されました。

夏休みだからこそ、多少負担になってもホストファミリーを引き受けたこの体験は、和田家にとってかけがえのない思い出となっています。もう一つの収穫は、普段じっくり話すことのない家族がホストファミリーとしてどんな受入計画を立てるか、役割分担をどうするかなど家族で真剣に話し合うことができたこと。家族の結束がより固くなったと思っています。

秋田県では、児童生徒に対して自分の考えや気持ちを英語で発信する力の育成に力を入れてい

ます。インターネットなどで英語と接しようと思えばいくらでも機会はあります。ただ、目指すところは、できるだけ子どもたちにはバーチャルではなく、異文化に五感を使って触れてほしいと思います。背景が分からないと聞いても理解できないことがあるし、聞き取れないと次の言葉を出すこともできません。言葉を学ぶときはその背後にある諸々のことを一緒に学ぶ必要があります。海外で異文化体験することは意義がありとても大切ですが、機会があれば、国内にいても国際交流ができる、心と心を通わすホストファミリーを皆さんも引き受けてみませんか。

### 上手に「充電>放電」にする夏休みに

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 松本 貴泰

この度、原稿依頼をいただき、「テーマは何か？」と依頼文書に目を落とすと…『教育現場での夏の思い出のご紹介』とのことでした。さて、どうしよう…。

昔々、知り合いから「いいなあ、学校の先生は夏休みあって。」と真顔で言われたことがあります。stromasのみなさん、そう思っている人もいるのです。

でも実際、子どもたちが夏休みの間、現場（小学校）では、何が行われているのか…興味ありませんか？

そこで、令和5年度、私の「現場の夏休み」の主な仕事の内容を紹介します。ただし、これはあくまで一例であり、一部です。昨年度、私は学級担任、生徒指導主事をしていて、子どもたちの夏休みは、7月22日（土）～8月24日（木）までの34日間でした。記載のない日は、通常勤務をしたり、年次休暇（時間・1日）を取ったりしています。

7月24日（月）保護者面談8件  
7月25日（火）保護者面談8件  
7月26日（水）保護者面談5件  
7月27日（木）保護者面談7件  
7月28日（金）前期学校経営反省職員会議  
8月2日（水）市生徒指導協議会巡視活動（市内の児童生徒が立寄りそうな店舗、施設）  
8月4日（木）教育課程研究協議会  
8月10日（木）人間ドック（職務専念義務の免除）仕事ではないけれど…  
8月11日（金）山の日～8月17日（木）夏季休暇等でお休み  
8月18日（金）市教育研究会指導案検討会（体育）  
8月21日（月）5年生課題提出日（学習会）夏休み町内巡視、町内会長、民生委員との情報交換会  
8月22日（火）～24日（木）2学期準備最終確認



(学年部会、教材点検、教室環境点検、  
黒板メッセージ、始業式後の生徒指導担当から  
のお話原稿作成など)

8月25日(金)2学期始業式

当然ですが、決して子どもたちと同じ期間、夏  
休みがあるわけではありません。けれども、それ  
以外の時間を、先生方一人一人が工夫して、「上

手に充電」に充てながらも、2学期に向けて準備  
を整えていくという貴重で充実した期間でもあり  
ます。そして…これまでの夏休みの体系と全く異  
なる、大学院生として迎える「おそらく最初で最  
後の夏休み」。このチャンスを逃すものか!と思  
案する7月中旬なのであります。

## 結びに

この度は、暁鐘の音第31号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の31号では、昨年度に引き続き、教育に関するテーマや、「夏」という季節、そして学生の自主的な学びの様子に焦点を当てて原稿を依頼させていただきました。今年度は全ての院生室が満員となっており、より一層賑やかな雰囲気でも過ごしている皆様の姿がとても印象的です。後期からも学びや研究に勤しみつつ、各種イベントを通して皆様が笑顔で過ごすことができるように祈っております。

暁鐘の音 第31号 編集担当 東海林天

